

高齢社会と教育 I

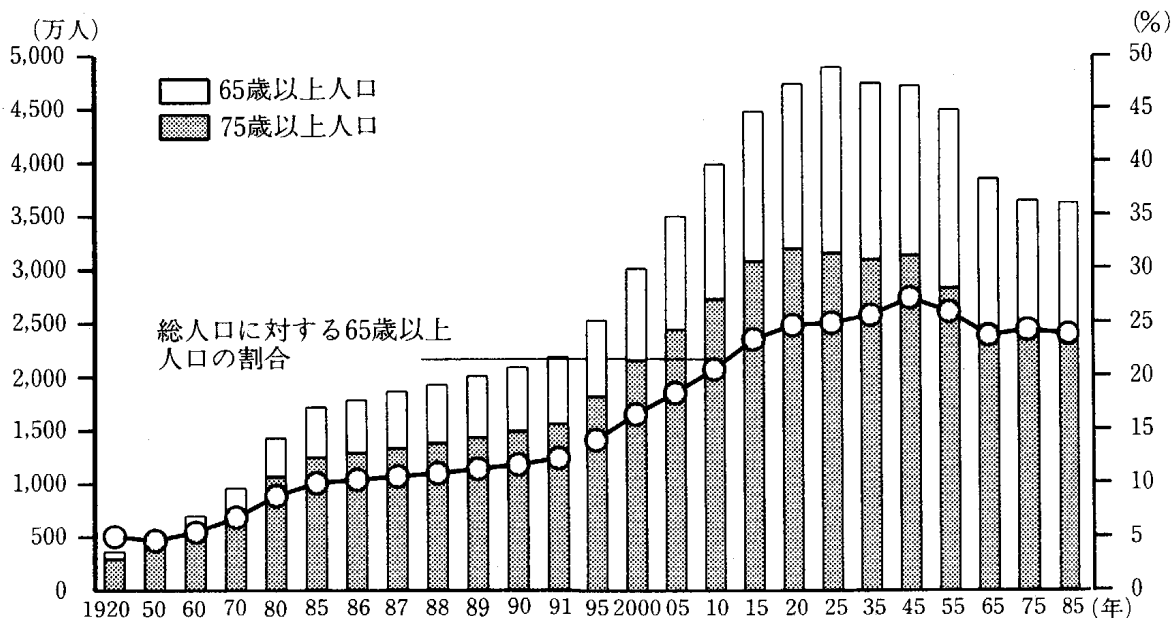
——高齢社会と子どもの教育——

横 山 ひろみ

近年我が国では、急激な高齢社会の到来と、少子化現象の危機が叫ばれている。しかしその予測の実態は体系的にはいまだ理解されていないのが現状である。私は本論文において高齢社会の実情と、少子化現象の原因を分析し、高齢社会を支えることになる現代の子ども達の教育の現状と問題点を分析し、それをふまえた上で将来を見据えた観点から、子ども達にはどのような教育が必要か考察したいと考える。

1. 高齢社会の現状と分析

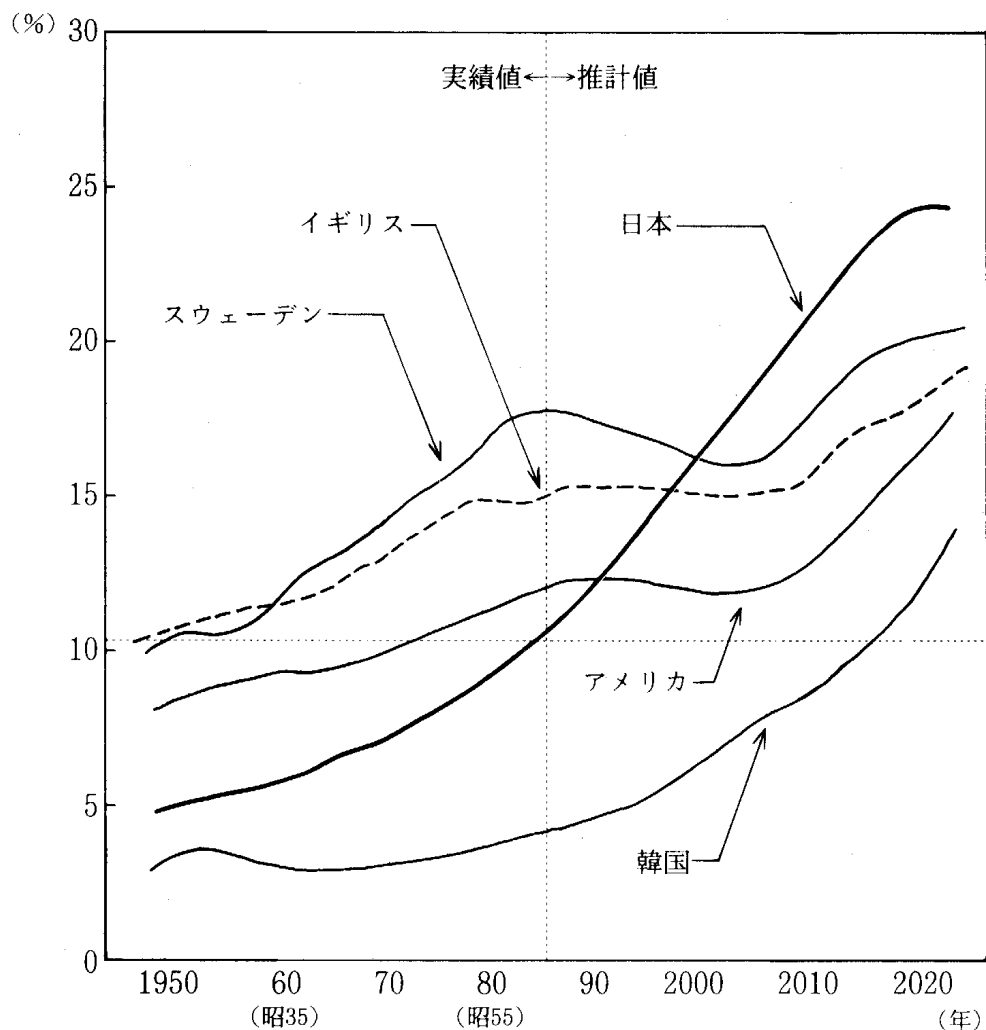
高齢者とは65歳以上の人々を指し、総人口に対する高齢者の割合を高齢者人口比率と言う。1995年9月の国勢調査によれば、日本の高齢者は男性、749万



資料 総務庁「国勢調査」、1986年～1989年および1991年は同「推計人口」、1995年以降は厚生省「日本の将来推計人口」1991年6月暫定推計・中位推計値、2025年以降は参考推計

出典 総務庁『長寿社会対策関係資料集』1992年

図1 老年人口の推移と将来推計



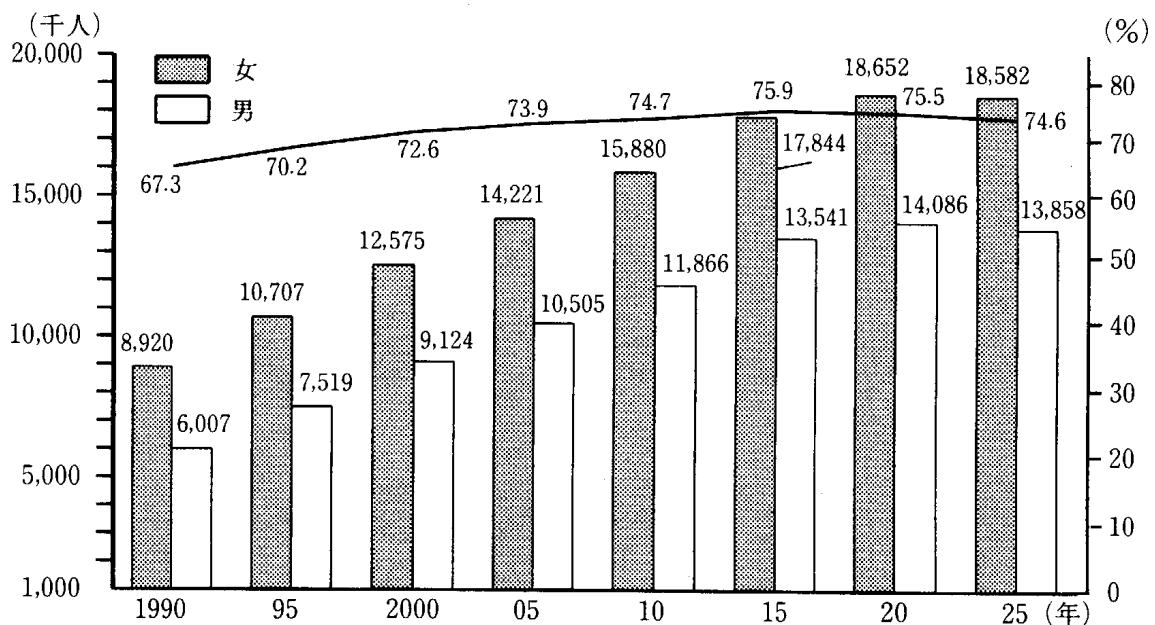
資料：国民生活白書'95年（平成6年）版より作成

図2 各国の高齢者人口比率の推移

人、女性、1072万人、合計1821万人であり、高齢者人口比率は、14.5%である。ちなみに近年、高齢化社会という言葉聞き慣れているが、それは高齢者人口比率が7%を越えた社会を指す。しかし、14%をも越えた社会は、高齢社会と呼ぶのである。日本は既に高齢社会となったのである。高齢者人口比率の年度毎の推移は図1の通りである。

40年前の1955年は5%であったのが、1995年は14.5%、そして2005年には19.1%、30年後の2025年には25%に達し、総人口の4人に1人は高齢者になると予測されている。世界においても確かに、高齢化の傾向はあるが、日本の場合はそれが急激に進んでいる所に問題があると言える。それは各国の高齢者人口比率の推移（図2）を見ても明らかである。高齢者人口比率が7%から14%

に移行するのにアメリカでは70年、スウェーデンでは85年、フランスでは130年かかる見込みであるのに対して、日本では24年で達してしまったことから見てもその急激さは明らかである。しかし日本社会は、そのスピードに対して何ら準備ができていないのが現状である。福祉など社会制度の整備や、性別役割分業意識の改革がいまだ進んでいない状態であるがゆえに、超高齢社会の矛盾が女性の上に集中的に現れることが懸念されているのである。女性の老後の保障の無さ、介護面での女性の負担増等、高齢問題は女性の上に大きくのしかかってくる問題であると言えよう。⁽¹⁾ 特に高齢女性の人口が高齢男性の人口に比較して常に多くなっていることは、図3を見ても明らかである。しかも、高齢男性の1人暮らし数が、29万5千人に対して、高齢女性の1人暮らし数は161万3千人に上ぼり、男性の5.4倍である。1人暮らしの高齢者のほとんどが女性であり、それは高齢女性の悲惨さにつながっているのである。75歳以上の女性の自殺死亡率（人口10万人当り）は、日本では52人で、世界第二位である。（第1位はハンガリー）それは主として女性が社会的にも無力な存在となっていることに原因があると考えられよう。女性は常に誰かに支えられないと生き



資料 厚生省「日本の将来推計人口」（1992年9月推計）

出典 総務長『長寿社会対策の動向と展望』1993年

図3 男女別65歳以上人口の将来推計、人口性比（女100人につき男）

てゆけない存在であり、その支えを失った時点で経済的にも精神的にも生きる術を失ってしまう現実。日本が直面する高齢問題とは、まさに女性が平均寿命83年の人生をいかに充実して全うできるか、という女性の問題としてとらえなければならない。そのためには何よりも女性自身が自らの人生を自分の力で真剣に築いてゆくことが不可欠になっているのである。

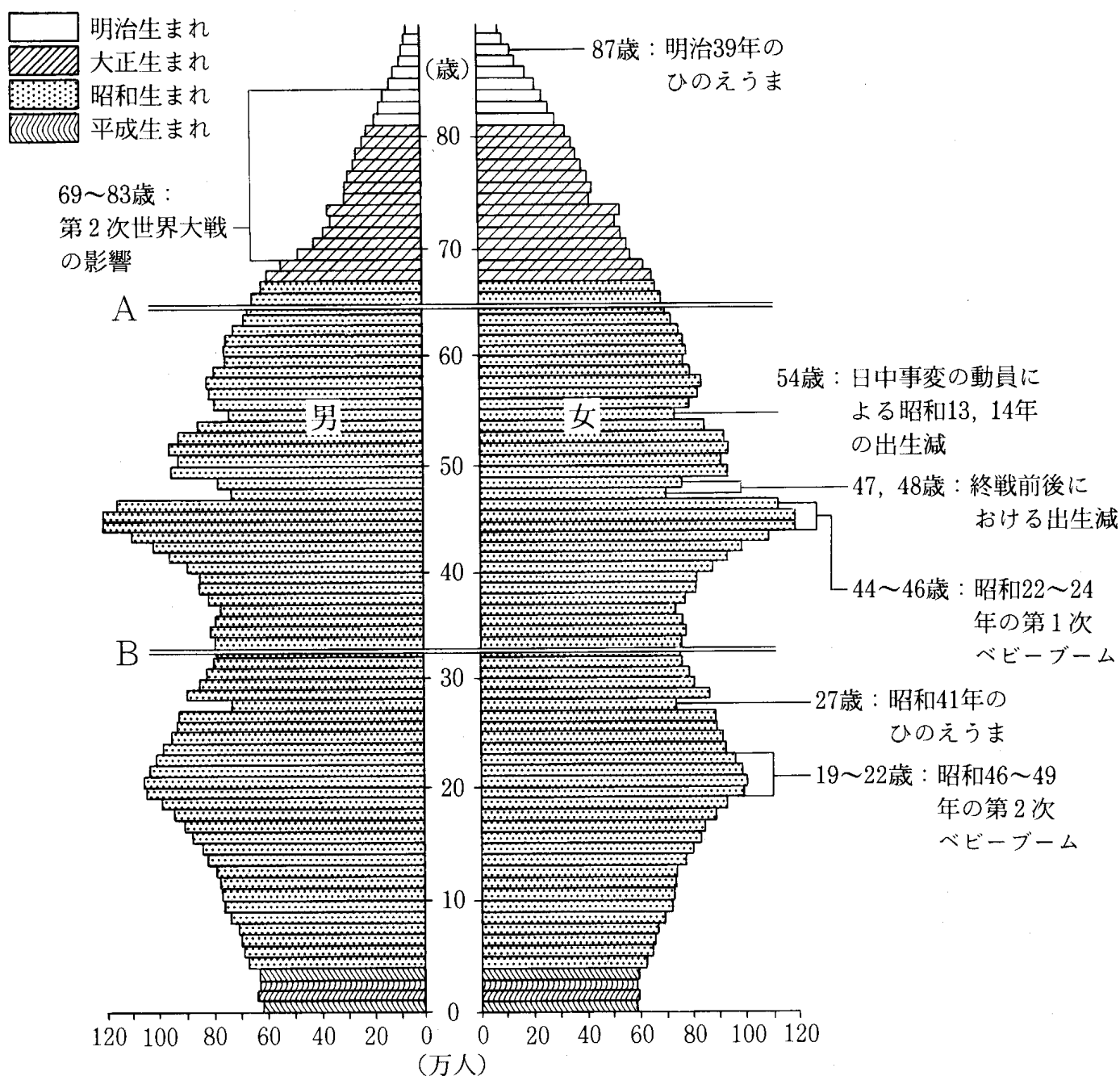


図4 平成5年10月1日(1993)現在 我が国の人口ピラミッド

総人口の中での高齢者数の割合をよりはっきりととらえるために、年齢別人口ピラミッド図において考えてみたい。(図4) A線より上が現在の高齢者数である。A線より下に、50代の人口のふくらみ、そして第一次ベビーブームの大きなふくらみ、そして20代に第二次ベビーブームのふくらみが続き、これらの多くの人口が社会を支えていることが理解される。しかるにB線の方は、30年後の2025年に65歳になる人々を表わす線である。また、図5は、2025年の人口ピラミッドを予測し、それを1990年のピラミッドと重ね合わせて比較したものである。どちらの図においても高齢者の比率の増大がはっきりと予見されるのである。特に図4においてはB線より上の高齢者のふくらみに対して、B線より下の、高齢者を社会において支えなければならない年齢層が、非常に貧弱であることが理解される。特にこの図上での0歳は30年後30歳となって労働活力の中核的存在となる世代であるが、その人口は図上での45歳(30年後の75歳)の人口の半分でしかない、という厳しい現実が読み取れるのである。まさに30年後、日本の人口の4人に1人が高齢者となる現実が、確信を持って把握できるのである。しかも1995年の出生者数は、119万3千人で戦後最低記録を更新した。生まれて来

る子どもの数は着実に減り続けている。ふくらみ切った高齢者数を支えるべき若年層が刻々と減少しているのである。その上、1995年の人口の自然増加数は27万7千人で初めて30万人台を割り、戦後最低となっている。

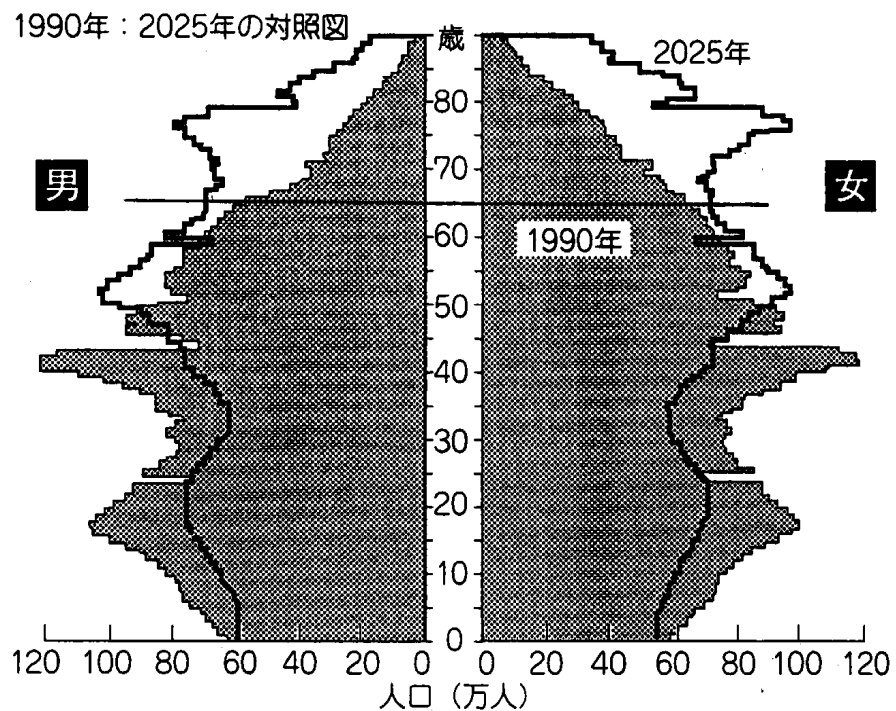
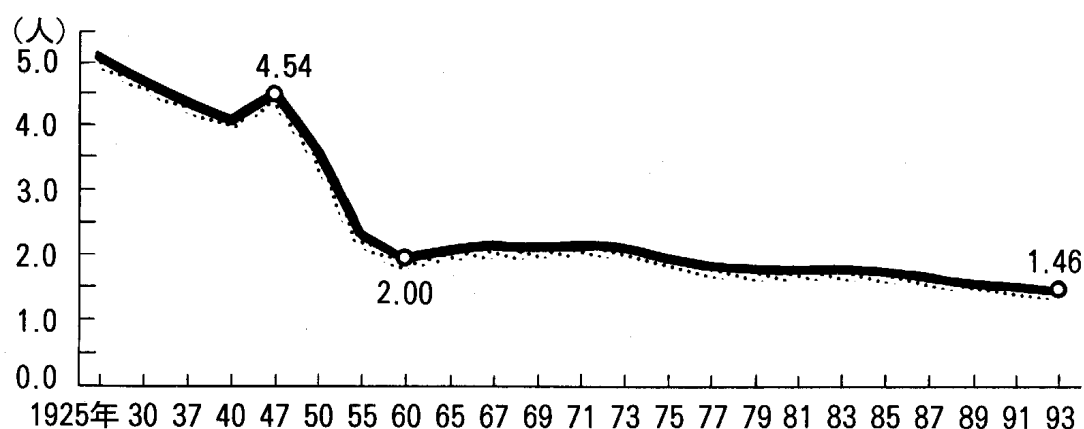


図5 人口ピラミッドの比較（1992年厚生省中位推計による）

25年前の1970年代には自然増加数は120～130万人であったことに比べると、現在はその頃のわずか¼に落ち込んでいるのである。

ここでこの果てしない超高齢化の原因について考察してみることにする。まず考えられるのは戦争による影響である。戦争直後の1947年から1950年にかけての第一次ベビーブームによる人口急増期が最大の要因であろう。しかし、それ以前の人口も漸次的に増加傾向にあったことを見落としてはならないであろう。昭和ヒトケタから団塊の世代までであるが、これは日本の近代化とそれに伴う医療技術の発展とに関連づけられるのである。旧来、多産多死の社会であった日本では、国家の近代化とともに乳児死亡率が減少するようになった。この移行期において、従来の多産に加えて少死現象が出現したと考えられる。⁽¹⁾ このように団塊の世代に至る以前にも多産少死による慢性的な人口漸増期が続いていたことを見逃してはならないであろう。

更に高齢社会の要因として、高齢人口の増加と同時に次を担う世代の人口減少現象も解明しなければならない。注目すべきは、人口ピラミッド図においても第一次ベビーブームの後、急激に人口が落ち込みその状態が15年近くも続いていることである。図6の合計特殊出生率の年度別推移表において、この傾向はより顕著になる。1950年から1960年にかけての急激な低下が大きな要因として問題なのである。そこには子どもの数を意図的に2人程度にし、ゆとりと手



(注) 合計特殊出生率 その年の年齢別の出生率がそのまま続くと仮定した時に、1人の女性が一生のうちに生む子供の数

図6 合計特殊出生率の推移（'94国民生活白書から）

間をかけて育てようとする戦後の新しい家族像が出現し、国内に広まったものと考えられる。それは同時に国家の意図でもあった。1948年に優生保護法が人工妊娠中絶を条件付きで認めたことでも理解される。それ以来出生率は次第に減少を続け、1995年現在、1.46人を下回るのは確実となっているのである。ちなみに現在日本の合計特殊出生率は、世界で最下位から3番目である。最下位はイタリア、次がドイツで、これら3ヶ国に共通する点は、家父長制と性別役割分担意識がいまだ残っており、子どもは3歳までは母親の手で育てるべきだという風潮が強いことであると言われている。

以上見てきたように、人口問題はどの時代を切り取っても、その増減はすべてその時代の社会状況の変化を如実に反映した結果であることが明らかである。戦後50年である現在、その50年より以前から脈々と時代の姿を映しとってきた人口増減のいびつな姿を、政府はもっと敏感に受けとめ、その予測を立て、時代毎に着々と対策を打ち出して来るべきであった。しかるに老人問題はすべて家庭内の問題とする日本型福祉の伝統の中で、介護はもっぱら女性の仕事として放置されてきたのである。今に至ってやっと介護保険の導入を始めとして高齢者問題は社会全体の課題として受け止められるようになったのである。しかし、高齢社会の主たる問題としては、老人医療費の財政や国民健康保険や組合健康保険への多大な依存がある。約1割の65歳以上の老人が使う医療費は、国全体の医療費の約4割近くになっており、高齢者人口の増加と年金制度の成熟により、高齢者向けの社会保険費の増大が避けられなくなっているのである。よって現在、自らの老後の年金のすべてを他の勤労者によって積み立ててもらっている専業主婦も、今後は社会の中で働くことによって自らの老後の資金を自らの手で積み立てて、福祉財源増額のためにも自らの力で税金を支払うことは当然となるであろう。女性自身も社会保障の大きな支えとなるために、社会的存在として責任を持って自立することが求められているのである。

それと同時に、現在の18歳から0歳の子ども世代は30年後48～30歳となり、高齢社会を経済の面でも福祉の面でも支える中核的存在となるのである。日本を経済的にも成り立ち、福祉的にも充実した社会にするためには、現在育てら

れている子ども達が叡知を傾けて、山積した難題を人間的な視点から解決し、乗り切ってくれなければならないのである。しかるに現在の子どもに対する教育がその点をどう反映して行われているか、大いに疑問である。高齢社会を見通す力に欠けていた政府は、今度こそ社会の舵をとるべき人間の、真の意味での育成を誤ってはならないであろう。

2. 子どもの教育の現状

ここで子どもの教育の現状を考察してみることにする。現在の子ども達はどうのように育てられているのであろうか。現在子どもの教育を左右している最大の要因は、大学入試を頂点として小学生、幼児までも巻き込んだ偏差値教育であろう。偏差値は1970年代から全国に広まり、進学志望決定の評価基準として絶対視されてきたが、すべてを点数化して子どもを成績のみによって余りに明確に位置づけてしまうことにより、点数では計れない最も人間的な意味での重要な部分が見落され、評価されなくなる。その結果、人間的な個性、人格の高さ等は価値外のものとして軽んじられ、教育の中では育てられなくなったのである。従って無限の可能性を秘めた子どもが、成績という一面的なレッテルのみで評価づけられ、早い時期から子ども自身の伸びようとするエネルギーを、無気力という沈澱物として心の奥深くに推積させてしまうことになったのである。更に幼い頃から競争原理の中に組み込まれてしまうために、無限の時間をすべて自分のものとして自由に遊ぶという体験が失われつつある上に、人間として最も基本的な人格形成を行う以前に、他者を意識し競争、排斥するという体質が助長された。ゆったりとした人間関係を育むことを知る以前に、他人の評価や競争相手を意識せざるを得ないことにより、人間への不信感が植え付けられることになる。自己確立を阻まれ、他人の判断基準に左右され、競争心を煽られることにより、常にイライラして狂暴な面が助長される。しかし内面の狂暴さを取り繕い、外面を整えるために更に自己分裂が進み、遂には他人に露見しない形で狂暴性の矛先を向けようとする。当然反撃力の無い弱い立場の者がその対象となり、それが陰湿ないじめ行為へとつながっていると考えられる。子どもの心の中の満たされない気持ちとそれによるストレスが原因のひとつであろう。

それに対して従来の学校教育の現場では、偏差値神話の下で教科内容の消化と、児童生徒の管理に重点が置かれる傾向にあった。学校教育は人間を育てる本質を見失ったまま歯車が狂い続けていたのである。それは第一次ベビーブームから第二次ベビーブームに至る子どもの人口急増期と時期を合わせていた。人口増加による進学競争の当然の結果であったと考えられる。しかし第二次ベビーブーム世代の子どもの受験時期が過ぎようとしている今、教育現場にも徐々にではあるが理念的变化がみられるようになってきている。その要因のひとつは生徒数の減少により教育する側に余裕が出来てきたこと、又ひとつは1994年における児童の権利条約の批准である。条約では子ども達の人権を尊重し、意見表明権や結社、集会の自由、プライバシーの保護なども規定されている。これを受けて法務省では子どもの人権オンブズマンの設置を決め、文部省でも同年に「ひとりひとりを大切にする教育をより進めるように」との次官通達が出された。それに前後する形で所謂「新学力観」と呼ばれる新学習指導要領が目指す学力観が通知された。それによれば、従来のように知識や技能を子ども達に共通して身に付けさせることを主眼に置くのではなく、「子どもが自ら考え主体的に判断し、表現したり行動できる資質や能力の育成を重視する」点に特徴があり、個性と多様性重視の学力観と言われる。教師の学習指導は指導から支援へと転換され、学力の評価も知識・理解から、関心・意欲・態度に重点が移されることになった。表面的には教育方針として、人間性重視の方向に向かいつつあるように見受けられる。しかし、ここまで子どもの心を荒廃させて来たものを、教育現場での改革、方針の転換によって一掃することができるのだろうか。社会全体にその病巣が存在するのではないだろうか。そのような疑問を持ちながら、次に家庭教育の現状に眼を転じてみたいと考える。

3. 家庭教育の現状

では家庭ではどのように子どもが育てられているか、どんな問題点があるのだろうか。第一に、30～40年前まで日本の産業としては、農業が主であった。子ども達は多くの家族の人間関係の中で放任されつつ育っていった。母親も農作業に出る中で、人々は働きながら適度に子どもに目を配ってきた。労働する

人々を身近に感じながら子どもは自分の力で育っていった。しかるに現在、一人っ子であるか、又は少ない兄弟しか持たなくなった子どもは両親や祖父母の期待を一身に受けながら、しかも母親一人によって育てられることが多くなった。こうした母親は、他に仕事を持たない専業主婦であるからこそ、子育てに専業する、「専業母」にならねばならないと考えた。子どもを育てることに専念する母親業に就職した人々である。かくして母親の生きがい、仕事としての専業意識はすべて子どもの上に集中されることになる。母親達は常に子どもの上に自らの勤務評定を求めることになった。

少しでも早い時期から勉強させ始めないと不安で仕方がない、知育偏重の傾向が見られ、その代わりに人間としての成長を促す生活習慣やしつけがなおざりにされている。勉強さえできれば、他のことはどうでもよいという学力至上義の風潮が、人間形成の面で最も重要な時期にある幼児をも蝕んでいるのである。こうして母親と子どもが一日中小さな部屋で厳しく向き合い、母親は子どもの一挙一動に神経をとがらせて、ただただ子どもを駆り立てることになる。子どもは母親の顔色だけを見て、型にはまったいい子になろうとする。子どもらしい創造的な奔放さは育つ術も無いのである。母子の密着による過保護、過干渉、期待過剰の3Kが幼児期の頃から既に子どもを疲れさせているという。

それと同時に、社会的存在を捨て、家庭での子どもの教育を一手に引き受けざるを得ない母親のストレスも増大する。孤独な母親には良好な人間関係を築く心の余裕もなく、我が子が外へ自由な人間関係を求めて動き回ろうとするのとは逆に、母親は偏狭な人間関係の中に逃げ込もうとする。ヨチヨチ歩きで行動力が出た幼児を公園に連れて行っても、そこに来ている他の母親達と人間関係が結べない。そこでごくわずかの気の合う者同志で固まり、自らの保身のために他の大多数の母親達を無視し、排他的になる。母親の人間関係が細分化され、セクト化し、他に対して逃避的、或は敵対的となり、当然の結果として幼児もその感情的世界に巻き込まれるのである。砂場デビューの恐怖と呼ばれるこの現実、教育現場におけるいじめの体質と根本的には同じではないであろうか。幼児もまたこのストレスを小さい体に一身に受けて、情諸不安定に陥り、

内面的な狂暴性をごく幼い時期から増幅させていると考えられるのである。

その原因はまさに、社会における性別役割分担の現実にあると言えよう。夫は外で働き家庭のことは妻に任せ切り、妻は母として育児に専念して自らの生き甲斐を専業母としての成果の中に見出そうと子どもを駆り立てる。妻と夫の人間としての生き方のいびつさ、ひずみが子どもの上に大きくのしかかり、子どもの成長を歪めているのである。しかも母原病という言葉まで作られ、ミルク嫌い、ぜんそく、言葉の遅れ、登校拒否、家庭内暴力に至るまで子どもの心身上の異常症状はすべて母親の育て方に原因があると、母親のみが責められる現状がある。しかし根本的には、子どもに対して父親と母親の両方が育児にあたるというごく自然なことが行われず、父親が育児を放棄しているところに真の原因があるといえよう。遅まきながら、子どもの権利条約やILO国際労働条約の批准等によって政府は、両親の協力の下での育児を推進しようとしているのである。しかし現実の意識改革にはまだしばらく時間がかかると予想される。

ところで、ごく幼い頃から読み書き計算まで教え込もうとする早期教育に続いて、学童期の子ども達はどのような教育を親によって与えられているのだろうか。そこには学校の教育以外にも多大なお金をかけて子どもにさまざまなハクをつけさせようとする親の教育方針が浮び上ってくるのである。学校での勉強以外にも塾で勉強を習わせ、芸事やスポーツまで。しかもここでも重要なことは、それらの教育はすべて外部の教育機関に委託されている、つまり親はこれらのどれ一つとして自ら身をもって子どもに教えてやることをしないのである。すべて他所へ習いに行かせる。親は相変らず子どもを追い立てる存在でしかないのである。幼児期において親として教えるべき基本的な生活習慣やしつけをなおざりにし、また学童期にもこういった補充的教育を親子の触れ合いの中から育てていくことさえしない。親は子どものへの人間的な教育の機会を自ら放棄して、余計なことで子どもの成長にとって大切な時間を奪っているのではないだろうか。

では現実問題として子ども達はどのくらい習い事に通っているのだろうか。

図7は神戸市内のある市立小学校での1995年の習い事の学年別グラフである。小学生1年生ではピアノとスイミングは共に学年の半数近くの子供が習っている。2年生ではスイミングは半数以上が習っている。学年を問わず、ピアノ、塾、習字がベスト3を占めているが、学年が上がるにしたがって塾がスイミングにとって代り、6年生に至っては75%の子供が塾に通っている。子ども1人当たりの習い事の数は一平均して2つから3つが多い。週2日から4日通っている

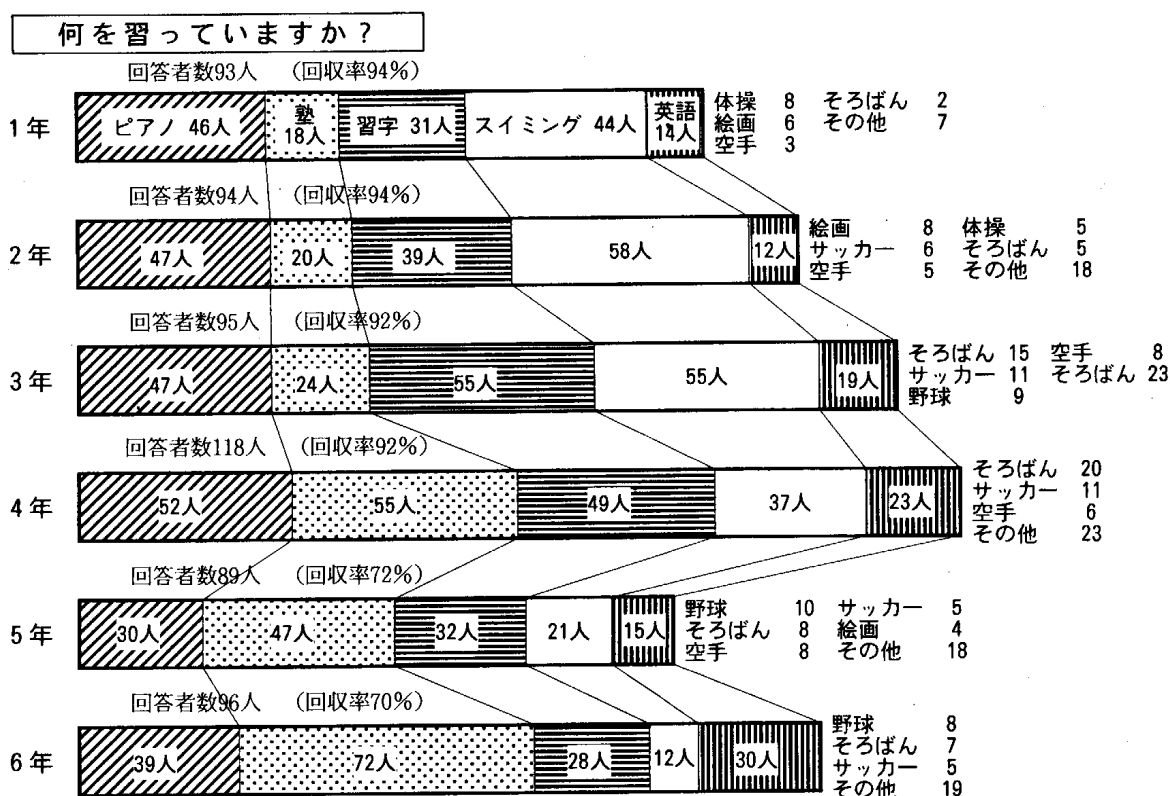


図7 塾と習い事について

いくつ習っていますか？								回収率
	0	1つ	2つ	3つ	4つ	5つ以上	合計	
1年	12	25	24	21	10	1	93	94%
2年	9	15	22	28	14	5	94	94%
3年	5	7	28	24	21	9	95	92%
4年	5	23	34	39	13	4	118	92%
5年	4	23	26	27	8	2	89	72%
6年	0	20	35	30	7	4	96	70%
合計	35	113	169	169	73	25	585	84%

ることになる。子どもの教育を他の機関に任せ、それに母子ともに追われている姿がはっきりと浮かび上がってくるのである。

しかしこのような現状の中で、子どもはまっとうな大人

へと育つことができるのであろうか。しかも前半で論じてきた、超高齢社会という人間として非常に敏感で微妙なる心くばりが必要とされる社会を、今の子ども達は少なき人数で、人間としての心と知恵を十分に傾けて支えて行くことができるのであろうか。その疑問を胸にこの教育現状を生み出した社会の問題について考察したいと考える。

4. 現代社会の問題点

近年日本の経済は大きな曲がり角にさしかかっている。果てしなく続いた経済成長がわずかの間に底知れない不況へと転落した。国民生活の基幹をなすべき政治体制も不安定に疲弊し、人間を包括する地球環境も悪化し続けている。ここに至るまで日本は、主に壮年のしかも男性達によって、競争原理を基盤とする経済活動優先主義で牽引されてきたのである。社会において、20～50代の働きざかりの男性が主役で企業利益、GNPアップが価値観の依り処であった。それは弱者である経済的後進国を自らの傘下に治めて、他の先進国との企業競争にしのぎを削るものであった。家庭も教育もその論理の下で動かされてきたのである。よって女性である妻は夫の経済戦争の銃後に留まり、家庭を守ることに専念せざるを得ず、子ども達は企業戦争の予備軍として一流企業を目指して受験戦争の中に否応なく組み込まれていった。こうして高度成長の美名の下で、日本人の道德観は大きな変貌を遂げたのである。競争原理による人間性の喪失がその最たるものなのである。

ところでフランスの思想家、ジャン＝ジャック・ルソーは、人間の本質を本来、善としており、この状態に留まっている時は自己愛 (amour de soi) を持っているとしている。しかし、他者との関係において競争の意識を持った時、人は自己存在を捨て、相対的存在、すなわち相対我 (moi relatif) となる。人間として謙虚に自己を見つめることを止め、他人との比較でしか自己存在を認識できなくなり、所謂自尊心に支配されると言うのである。「この比較が彼の心に起こさせる第一の感情は、第一位に立ちたいという願望である。このときにおいて自己愛が自尊心に変わるのだ。」⁽²⁾「最後に、個々人のあらゆる利害がかきたてられぶつかりあって、発酵させられた自己愛が自尊心に変わり、各

人に全世界を必要とされるあの世評というものが、人々をすべて互いに生まれながらの敵にしたてて、何人も自分の幸福を他人の不幸の中にしか見出せないようにさせる。その時になれば良心はあおり立てられた情念よりも弱く、情念によって押し殺され、しかも人間の口の中には、互いにだまし合うために作られた言葉しか残されていない。そこで各人は公衆の利益のために自分の利益を犠牲にすることを望んでいるかのようなふりをし、そして全員が嘘をつく。」⁽³⁾

こうした他人に抜きんでようとする願望は、敵対心、不信、陰謀、輕蔑、傲慢、嫉妬、虚栄、無恥、虚偽、裏切り、腐敗などを引き起こすという。これらは現在の日本人の心を蝕んでいる人間的精神の荒廃と、何と一致していることであろうか。こういったものは、人間としての価値の定義が、外面的なもの、計量可能で、比較可能な唯物的な物、すなわち金や地位、権力によってなされることによるといえよう。ルソーが200年前に予測していた心の腐敗状態を現在の日本において見出すことは、非常に残念である。しかし我々は今こそ、經濟優先主義によって踏みにじられた日本人の心を、何とかして人間としての尊厳を持った心へと恢復させねばならない。しかもその上に、あまたの高齡者を支えるために更なる寛容に満ちた心をも育てなければならないのである。何を依り処にすればよいのであろうか。再びルソーに眼を向けてみよう。

5. ルソーの「溢れ出づる魂」

悪徳の原因となる自尊心以前の、人間本来の感情を彼は自己愛と呼ぶが、それはあらゆる他の感情の起源であり且つ基本でもある。自己愛は常に善であり、常に自然の秩序に従っている。自己を保存するために我々は何よりも自分自身を愛することが必要であり、自己愛によって自己保存に注意させられ、理性によって指導され、憐憫によって変容されて人間性と徳とを産み出すものなのである。しかもそれは自己保存の衝動であると同時に、自己活動、自己展開の衝動となるのである。人間が他者との比較競争による物質的な価値観にとらわれている現在、新たに自分自身を見つめ直し、自己の絶対的存在を認識して活動を展開してゆくことは、我々には大いに示唆に富んだ指摘であるといえよう。こうした人間性の恢復と共に、弱者として位置づけられる高齡者を、人間の尊厳

を失わずに支えてゆくために、我々の子ども達には更なる力が求められるのである。この精神基盤として、自己愛と共にルソーが指摘する憐憫の情(pitié)を位置づけることができよう。彼によれば憐憫の情は二つの基礎を持っている。一つは、人間がその仲間が苦しむのを見ることを嫌うという自然的傾向であり、二つ目は、人間は自ら自己愛を満足させ、自己の保存に役立つものを愛するという傾向である。つまり、憐憫の情によって人間が互いに同情し、慰め合うだけでなく、互いに協力する関係を作り上げることなのである。その際には、助ける者は弱者に対する同情から助け、助けられた者は彼に対して愛と感謝の念を抱く、つまり他者と内面的に結び合いながら、愛情と協力により信頼関係を築き上げる真の連帯が実現されるのである。その感情は「溢れ出づる魂」となって隣人愛から全人類への愛にまで広がるものなのである。この自己愛と憐憫の情の示唆によって、我々はこれからの子どもの教育をどう改革すればよいか考えてゆくことにする。

6. 子どもの教育の改革

まず第一に留意すべきことは、善なる存在として生まれている子ども達の善性が損われないように注意深く守ってやることである。ルソーはこれを消極教育という。「善き教育とは消極的なものでなければならない。……悪徳が生まれるのを防げよ。そうすれば徳のために十分に尽したことになるのだ。」⁽⁴⁾社会的、世俗的悪習に染まったものを子どもの中に持ち込まない、阻止することが重要である。そして悪習から子どもを守った上で、本来の善き素質を伸ばしてやることが肝要なのである。情報が溢れ返っている中で、何の保護もなしに大人の実利的な論理が子ども達の心に染み込んでいく現在であればこそ、この消極教育は困難ではあるが、最も重要な教育方針であるといえよう。

消極教育を実践した上で更に留意しなければならない教育は、自然に叶った方法で子どもに自己を見つめ直させ、自らで成長する力を育むことである。ルソーは三段階の感情を指摘している。感情、願望、良心である。人間本来の自然な成長の過程でこれらの感情を身に付けて、能動的に行動を展開できる人間へと成長させたいものである。その結果として憐憫の情も育まれ、それは溢れ

出づる魂となって他者への助けに向い、真の人間の連帯を実現することになる。そのためには、親がその規範とならねばならないことは言うまでもない。

ここで現代の子ども達における教育のあり方を具体的に検討してみることにする。まず消極教育の観点から考える。善い素質を持って生まれた子ども達を、大人社会の質の悪い物から守ってやること、これは親の義務であるが、現代におけるその最たる物はテレビであろう。けたたましい音と低俗な内容、脈絡の無いことを刹那的に叫ぶコマーシャル、こういった物は、何もかも即時に吸収しようとして脳細胞が刻々と増加している子どもを分裂状態にし、損っていることは明らかである。またテレビによって子どもは受動的立場に置かれる。それは自然の発達を阻害し、積極的な言語コミュニケーションができず、自閉症的行動傾向を生み出す原因となる。テレビを漫然とつけ放しにすることは禁物である。子どもにとって良質と判断される番組のみを選んで見せることである。同時にコマーシャルの時はせめて消音する配慮が必要である。その意味でまさに親の生活態度も問われることになるのである。

テレビゲームも同様である。機器相手に遊ぶことにより、テレビと同じく人との接触を忌避する傾向になる。つまり1対1の人間関係である二者関係が結ばずに、人对高度な代理機能を備えた機器との1対0.5の関係、すなわち1.5のかかわりしか持てない人間になってしまうのである。またゲームの内容としても、攻撃、作戦、損得といった非常に自尊心的傾向を助長するものが多く、それは大人社会の縮図的精神世界である。ここにおいて既に生きる基盤としての人間的な学び取りの芽は摘まれてしまったも同然である。こういったブラウン管症候群による孤独化行動を防ぐためにも、親はテレビゲームを子どもに与えてはいけないのである。以上、子どもの世界に入り込む主たる社会悪の例を挙げたが、その他にも雑誌や漫画においても、一見子どもの目を引くものであっても、内容的には大人の好みに迎合した大人の論理の反映である場合もある。このように親は消極教育の責任者として、常に注意深く子どもを守らなければならないのである。

さて、消極教育を実践した上で次に子どもをいかに育てるべきであろうか。

まず第一に留意せねばならないことは、すべてが自然に叶ったものであること、子どもの年齢に応じて自然な形で子どもの成長の助けとなるように心がけなければならない。

外で、自然の中で自由に活動させる。大気、緑の息吹き、風のそよぎを膚で感じさせる。空の広さ、青さ、はてしなさを全身で感じさせる。その中で身体を自由にさせる。身体が要求するままに動かしておいてやる。それが自然な形での運動につながるのである。ルソーによれば子どもの本質は、成長しつつある肉体の要求にあるのであり、よって勉強というものは、肉体の要求を阻むものであり、子どもにとって退屈なものである。それに対して運動は、彼らの身体が求める動き回りたいという欲求を満足してやることにより、彼らを喜ばせる、つまり悪徳の入り込む余地を無からしめるものだからである。⁽⁵⁾ 大空の下で自らの肉体的存在を喜びを持って感じさせてやり、そして身体を鍛えさせるのである。子どもが加齢するに従って、この運動も個人的なものに留まらず、複数で集まり共に協力して行うようにするとよいであろう。集団の中で自らの存在を個人的に感じると同時に、視線によって周りの仲間の存在を感じ、次に仲間と共に輪の中に居る自らの存在を感じる。幼い時から自然の只中で、人間同志の連帯を膚で感じさせて育てるということは最も大切な教育方針であろう。

次に重要なことは、感覚、感性を磨くことを目的として教育することである。子どもは生まれてすぐに脳は非常な速度で発達を遂げるが、その時こそ良質な刺激が必要とされるのである。未だ一点の曇りも無いこの感覚世界を、とおきの美しいもので完成してやらねばならない。人間社会の悪習にまみれた足で踏み込んではいないのである。澄み切った眼には美しい絵や光景、やさしい笑顔を見せてやり、とぎすまされた耳には心地よい音や音楽、愛情に満ちた声をきかせてやりたい。こうして生まれながらの感覚に感性のふくらみを持たせてやるのが大切である。

このように磨かれた感性は、未だ受動的な状態にある。次の段階として能動的な感性を育てる必要がある。子どもが自己表現ができ、言葉を話せるようになったら、その動作や片言に面倒でも応じ、耳を傾けてそのすべてをやさしく

受けとめてやる努力をしなければならない。美しい光景，良い絵本，豊かな言葉や音楽を感じた心は，今度は自らが発信し，表現することができるようになるのである。まだ不完全でもどかしい表現もあろうが，それをあたたかく受け入れてやることにより，その自己表現力はより進歩し，心からの信頼関係の中で能動的な感性が養われるのである。その感性は持続的に良い刺激を受けることにより，年齢に応じて内面的完成へと歩むことができるのである。子どもは決して大人の小さい者ではあり得ない。刻々と内面的発達を続け，人間たるものへの進化の途上にある，それ程感じ易く，こわれやすいものなのである。よって我々はその過程において，大人の弊害が侵入するのを防いでやり，その段階ごとの発達に沿ってささやかな手助けをしてやることが肝要なのである。

感覚の発達段階にある子どもに対して，大人の悪しき価値観を押しつけて知識を強要するのは愚かなことである。早期教育という商業主義に煽られて，より早い年齢から文字を読み，書かせることを競う親達は，子どもの，まさにその年齢でこそ必要される重要な発達を親自身が阻害し，子どもを損っていることに気づかねばならない。それに適した年齢になれば子どもは簡単に文字を読み，書くことができるようになるのである。重要なのは，その年齢になった時，文字を使ってどれだけ感性豊かに，内容を持って自分の世界を表現できるようになっているかである。文字は単なる手段，記号に過ぎない。それにこだわっても人間は育たないのである。このように子どもの生まれながらの良い素質を損ねないように大切に育てることにより，その感性は受動的なものから能動的なものへと磨き上げられる。心からの信頼をもって受け止められた能動的感性は，その対象を他者へと広げてゆくことになり，更に他者との心の交流，交歓を導き，そこに憐憫の情が生まれるのである。それは心の内に自己愛が練り上げられることに他ならない。

こうした自然の摂理に叶った初期発達が導かれ，その基盤ができてこそ，後に豊かな心を持ち，他者への愛情に満ちた人間へと成長できるのである。高齢社会を支えるために，人間が最も必要とするのはまさにこの能動的感性，自己愛，そして溢れ出づる魂ではないであろうか。その意味で子どもの初期の感覚

教育というものが、現在いかになおざりにされて、本来の発達が阻害されているかにまず気づかねばならない。その上で、今後早急にそれを是正し、自然の摂理に沿った人間性重視の教育の実施が必要とされるのである。したがって、子どもをぜいたく品のように扱い、お金をかけて習い事に追い立てても、それはその年齢段階で必要とされるゆったりとした子どもの発達の芽を摘みとることであり、本質的な教育に逆行したものである。子どもには豊かな感性を持って互いに心を結び、協力して遊び、作業する環境が用意されねばならないのである。

幼児期から大人世界の質の悪い心から守られ、素直な素質を伸ばされた子ども達は、自然のうちに良心と共に道徳的規範を育てることができる。大人はその環境を与え、見守ってやるのである。そして年齢、性別を越えた幅広い人々の集まりや作業の中に参加させてやる必要がある。男女の役割分担が機構化している現在、母親とのみ顔を向き合っているいびつな関係から脱皮させ、男女ともが参加し、若者や中年や高齢者といった幅広い年齢層を身近に感じる集団の中での作業を企画し、参加させてやる必要がある。その時も子どもは決して主役であってはならない。周りからご機嫌をとられる存在であってはならない。何よりも人生経験豊富な高齢者が主導権を持っていなければならない。そこでは高齢者は子どもから憐みられ慰められる者ではない。皆から尊敬され、従われる存在として子どもの前に堂々と姿を見せるのである。子どもに対して、年輪を重ねることへの尊敬の念を持たせ、多様な人間集団の中で子どもに自らの存在を感じさせることにより、素直な感性、溢れ出づる魂を育まれた子どもは、人間の輪廻を感得し、自らの歩む方向を自然のうちに理解するであろう。このように自然の摂理に従って子どもの善性を磨き、育ててやることにより、我々は何年か後に自らが高齢者の立場に立った時、我々が与えた教育の成果を満足を持って享受したいと希望するものである。

次回は高齢社会と、共生教育について論じてゆく。

註

- 1.『豊かさの中で』朝日新聞社、『図表で見る女の現在』ミネルヴァ書房

2. 『エミール』 IV

Emile bibliothèque de la pléiade P.523

Mon Emile n'ayant jusqu'à présent regardé que lui-même, le premier regard qu'il jette sur ses semblables le porte à se comparer avec eux; et le premier sentiment qu'excite en lui cette comparaison, est de désirer la première place. Voilà le point où l'amour de soi se change en amour-propre, et où commencent à naître toutes les passions qui tiennent à celle-là.

3. 『ボーマンへの手紙』

Lettre à C.de Beaumont ibid,p.937

Quand enfin tous les intérêts particuliers agités s'entrechoquent, quand l'amour de soi mis en fermentation devient amour-propre, que l'opinion, rendant l'univers entier nécessaire à chaque homme, les rend tous ennemis les uns des autres et fait que nul ne trouve son bien que dans le mal d'autrui, alors la conscience, plus faible que les passions exaltées, est étouffée par elles, et ne reste plus dans la bouche des hommes qu'un mot fait pour se tromper mutuellement. Chacun feint alors de vouloir sacrifier ses intérêts à ceux du public, et tous mentent.

4. 『ポーランド統治論』

Sur le gouvernement de Pologne p.968

Je ne redirai jamais assez que la bonne éducation doit être négative. Empêchez les vices de naître, vous aurez assez fait pour la vertu.

5. 『ポーランド統治論』

ibid,p.968

C'est de tenir toujours les enfans en haleine, non par d'ennuyeuses études où ils n'entendent rien et qu'ils prennent en haine par cela seul qu'ils sont forcés de rester en place; mais par des exercices qui leur plaisent, en satisfaisant au besoin qu'en croissant à leur corps de s'agiter, et dont l'agrément pour eux ne se bornera pas là.